愛知淑徳大学論集－文学部篇－　第44号　2019.3　23-42

愛知淑徳大学　英文学科総合英語学科 長期海外留学プログラムへの提言

Recommendation for a long term study abroad program in Aichi Shukutoku University Department of English

宮　腰　宏　美
MIYAKOSHI　Hiromi

＜はじめに＞

愛知淑徳大学、英文学科総合英語学科では、2018年度現在17の留学プログラムを運営しており、５つの提携校をアメリカに、３つの提携校をオーストラリアに、２つの提携校をイギリスとカナダに、合計12の大学と提携を結んでいる。今年度は27名の学生を各大学へ送った。留学プログラムの期間は、半期若しくは１年の２種類の期間があり、半年留学すると16単位、１年留学すると32単位認定される仕組みとなっている。2016年まではイギリスの提携校へ年間２回、オーストラリアの提携校へ年に１回、合計３回、期間は３ヶ月の留学プログラムを行なっていた。イギリスへの渡航は15名以内でTOEICを500点以上、GPA2.5以上、オーストラリアへの渡航にはTOEIC400点以上、GPA2.5以上と限定していた。2016年にはイギリス、オーストラリアの他、アメリカの留学先を増やし、留学期間も４ヶ月以上に伸ばした。TOEICの点数は、アメリカの留学先も含めそれぞれの大学毎に、400点以上、450点以上、500点以上の限定、GPA2.3以上の限定を課した。2016年に年間合計９プログラムとなったプログラム数は、2017年には17プログラムに増加し、2019年には20プログラムになる予定である。

20プログラムのうち、オーストラリアは４つのプログラム４つの提携校、アメリカは７つのプログラム５つの提携校、カナダは４つのプログラム２つの提携校、イギリスは５つのプログラム２つの提携校である。10～20人前後の学生を１つのグループとして送っていた時代には、大人数で留学していたということもあり、一緒に行く日本人同士で固まって団体行動をしていた為、思うように英語力が上がっていない学生がいたり、それを不満に思っている学生がいたりすることが問題点であった。したがって、提携校とプログラム数を増やすこと、団体であった留学からより個人に近い留学の形にすることで、留学効果を少しでも上げるということが当初の目的であった。このときの留学効果はTOEICの点数がどの程度上昇したのかで測られていた。当時はTOEICの点数は直接就職に関係すると考えられていたため、帰国後の学生の点数を上げるためにも留学プログラム自体を考え直す必要があったのだろう。更に、留学プログラム数を増やすことが大学進学を考えている高校生へのアピールになるであろうという近年の見方から、より多くの提携校と多くのプログラムを行なう結果になっていった。

しかしながら、プログラム数が増えて行くに従い、１つの渡航先に対する留学人数が少なく

なることや近年のテロ等による世界各国での事件の増加等、学生の安全の確保が懸念される。また多くのプログラムを運営する上で、事務手続き上の煩雑さが増す等のマイナス面も否めない。提携校やプログラム数を減らす方向で検討すること、例えば、各国につき１つの提携校、８つのプログラム（１つの提携校につき半期と１年の２つのプログラム）に削減することを検討しても良いのではないだろうか。本稿では、①留学した学生の満足度について、②留学効果とTOEICの関係について、③企業側から見た留学した学生の就職利点について、④留学プログラム数と高校生へのアピール度との関係、以上４つの観点から現在の留学プログラムを検証し、今後のプログラムあり方について提言を行ないたい。

＜現在の日本の留学の流れについて＞

平成25年に閣議決定された第２期教育振興基本計画は、グローバル人材の育成を目標の一つに掲げ、英語力の向上、英語教員の英語力の向上、日本人留学生及び外国人留学生の増加、大学における外国人教員の増員、大学に置ける外国語による授業実施の増加、大学の入学時期の弾力化を設定した。留学者数においては、日本人留学者を平成24年時の６万人から平成32年を目途に12万人に増員をする成果指標を設定した（2017，総務省行政評価局）。OECD(経済協力開発機構）の統計によると、平成26年の達成状況は5.3万人で、平成24年の６万人の実績から減少している。一方で、独立行政法人日本学生支援機構の統計によると、OECDの統計に含まれない交換留学等、大学等に在籍した状態で留学した人数は平成24年度の65,373人から84,456人に増加している（2017，総務省行政評価局）ことから、大学等を通じて留学に行く学生が増加している可能性がうかがわれる。2016年に一般社団法人海外留学協議会が行った調査結果では、2016年の留学先はアメリカ、オーストラリア、カナダ、イギリス、フィリピン、ニュージーランド、その他の順となっている。３ヶ月以上の語学留学での留学先としてはアメリカ、カナダ、オーストラリア、イギリス、フィリピン、ニュージーランドという順になっている(2017，一般社団法人海外留学協議会)。留学先としては英語を母国語として話す先進国に人気があると言える。一般社団法人海外留学協議会のレポートによると、やはり欧米圏のシェアが全体の80%以上と大きいが、フィリピンやシンガポール、中国、韓国、台湾等のアジア地域への留学が17%以上と、アジアへの留学の人気も浮上しているとある。また、今後の留学のトレンド予想としては、2020年の英語改革を見据えた若年化が進み、大学入試改革を受け、TOEFLやIELTS等の外部試験を利用した海外の大学出願の高校生が増加する可能性が高い他、日本企業で働く社会人が転職を機に留学する人材が増えていく見込みがある（2017，一般社団法人海外留学協議会）と述べられている。今までの留学は高校や大学時代が主流であったが、今後は小学生から社会人まで幅広い層で利用される学習手段になる可能性があると明記され、2020年の英語教育改革に向け、留学産業も変わりつつあるようである。

＜愛知淑徳大学英文学科総合英語学科の留学制度について＞

本学科の留学プログラムでは、アメリカ、イギリス、オーストラリア、カナダへ４ヶ月から10ヶ月の留学を行なっている。2015年度までは、大学の単位（16単位）認定の下、３ヶ月の留学をイギリスとオーストラリアに合計３回（提携校は２校)、一回につき、10〜20人の学生を１つのグループとして送っていたが、2016年からは期間を４ヶ月以上に伸ばし、４ヶ月以上の留学を半期留学、８ヶ月以上の留学を１年留学と定め、現在は１〜５名程の小グループを各留学先へ送っている。プログラム数については、2015年度に３つだった留学先から数を増やし、2016年度には９つ、2017年度、2018年度には17となった。

表１の１プログラム当たりの留学平均参加人数では、2015年度には13.66人だったものが、2016年度には3.56人に減少し、2017年度は1.53人、2018年度は1.59人となっている。また、プログラム当たりの参加最大人数は、2015年度は１つのプログラムに21人だったものが、2018年度には５人となっている。最小人数では、2015年度には８人だったものが、2016年度からは最小人数１人が続いている。本学科のプログラムでは、２つのアメリカ留学プログラムを他学科開放科目としている為、2016年以降、本学科学生だけでなく、他学科の学生も英文学科のプログラムを使って留学している。下記表１では、2016年度は２名、2017年度は３名、2018年度は２名が他学科よりアメリカ留学プログラムに参加した。

表１．１プログラム当たりの留学平均参加人数

	2015 年度	2016 年度	2017 年度	2018 年度
派遣先国数	2 （イギリス、 オーストラリア）	3 （アメリカ、 イギリス、 オーストラリア）	4 （アメリカ、 イギリス、 オーストラリア、 カナダ）	4 （アメリカ、 イギリス、 オーストラリア、 カナダ）
プログラム数 （派遣先大学数）	3	9	17	17
参加人数	41	32	26	27
１プログラム 当たりの平均 参加人数	13.66	3.56	1.53	1.59
１プログラム 当たりの参加 最大人数（国）	21 （オーストラリア）	9 （オーストラリア）	6 （オーストラリア）	5 （オーストラリア）
１プログラム 当たりの参加 最小人数（国）	8 （イギリス）	1 （イギリス）	1 （アメリカ、カナダ、イギリス）	1 （アメリカ）

表２．国別参加人数

国	2015 年	2016 年	2017 年	2018 年	合計
アメリカ		10	7	3	20
イギリス	20	4	5	6	35
オーストラリア	21	18	13	12	64
カナダ			1	6	7
合計	41	32	26	27	126

表３．期間別参加人数

	2015 年	2016 年	2017 年	2018 年	合計
３ヶ月	41				41
半年		26	19	17	62
１年		6	7	10	23
合計	41	32	26	27	126

表４．国別・期間別の留学人数

国	期間	2015 年	2016 年	2017 年	2018 年	合計
アメリカ	３ヶ月					0
イギリス		20				20
オーストラリア		21				21
カナダ						0
アメリカ	半年		8	5	2	15
イギリス			4	5	3	12
オーストラリア			14	8	9	31
カナダ			0	1	3	4
アメリカ	１年		2	2	1	5
イギリス			0	0	3	3
オーストラリア			4	5	3	12
カナダ			0	0	3	3
合計		41	32	26	27	126

表２の2016年度からの留学実績を見ると、オーストラリアへの参加人数が、２番目に多い留学先であるアメリカの２倍以上近くあることが分かる。オーストラリアとアメリカへの留学は多いように見えるが、実際は年々人数が減少していること、イギリスとカナダへの留学は毎年少しずつ増加している傾向が見られることにより、留学先の分散化が見られる。期間別に見ても、2016年度には半年の留学が26、１年の留学が６であったのが、2018年度には半年の留学が17、１年の留学が10になるなど、年々半年の留学が減り１年の留学が増えている傾向が見られる。また、2016年度と2017年度には１年の留学はオーストラリアとアメリカに偏っていたが、2018年には参加人数の偏りがほとんど見られなくなった。全体の参加人数は、2015年度の41人と比較すると、2016年度からは毎年30人前後となり、留学先が少なかった頃に比べ比較的減少傾向にある。留学人数が増えないことについては、近年、経済的理由やGPA•TOEICの足切りの点数が足りないという学業能力的理由から留学の申込ができないという相談を、直接学生

から受ける回数が増えている。更に留学のみならず、学費さえも自分でアルバイトをして賄わなければならないという学生も少なくない。しかし一方で、留学プログラム自体は2016年から留学に申し込む為のGPAを2.5から2.3に下げ、2015年の時点ではTOEICの点数もイギリス留学の為には500点、オーストラリア留学に400点必要だったところから、2016年からはアメリカ留学の為にTOEIC450点という設定をすることで、500点に届かない学生がオーストラリア以外の選択をすることができるよう配慮している。留学申込の際のTOEICの点数設定については、留学先によってTOEIC400点、450点、500点の目標点数があることで、学生の学科での意欲向上に繋がると考えられる。齊藤（2012）は、高く具体的な目標設定が、低く曖昧な目標設定よりも意欲を喚起すると述べている。吉川（2016）は、期待理論の例として留学を挙げ、英語の勉強をして試験の点数が上がることが期待され、点数が上がると留学へ行ける可能性が高くなり、留学は将来の夢に繋がる価値のあるものだとなれば、期待・道具性・誘意性という3つの要素がいずれも高い状態になり、英語の勉強への意欲は高くなると説明している。以前イギリス500点、オーストラリア400点という設定であった時代、イギリス留学は、15名限定という人数制限を設けていたので留学前の面接で受からない学生もいた。その為、イギリス留学をする事ができた学生は、GPA2.5とTOEIC500点をクリアし、更に面接も受かったという緊張感をもちながら留学に臨んでいたという実績もある。留学の為のTOEICやGPAの目標設定はもちろんのこと、今後は留学前の面接のあり方を改めて模索することで、学生の意欲の向上に繋がる可能性も考えられる。以上のことから、留学先が増える中、留学者の人数が減っているという現状を考慮し、学科の留学への方針を再考察した上で、留学プログラムを構成し直す必要もあるだろう。

＜留学した学生の満足度について＞

表5は留学した学生の満足度についてで、学生に「留学当初の目的を達成することができたか」という問いに対し、1～5のスケール（5：目的を達成できた、4：大体目的を達成できた、3：どちらとも言えない、2：あまり目的を達成できなかった、1：目的を達成できなかった）で回答してもらった結果を、渡航先と渡航期間別にまとめた。サンプル数は、半期ではイギリスが12、アメリカが14、オーストラリアが30、カナダが3、1年ではアメリカが4、オーストラリアが12、イギリスとカナダが0と少なく、半期と1年の満足度を比較した時、半期の平均は4.11、1年の平均は4.17とあまり差がでなかった。国別で満足度の平均を比較すると、オーストラリア4.20、イギリス4.17、アメリカ4.11、カナダ4.0の順となった。国別、期間別での平均を比較した時、アメリカ1年4.75、オーストラリア半期4.20、オーストラリア1年4.17、イギリス半期4.17、カナダ半期4.0、アメリカ半期3.92の順となった。

自由記述から見た満足度については、「留学を通して良くなかったことや、プログラムで改善してほしいことをお書きください」という質問に対し、2016年のイギリス半期留学生の回答からは、「（略）クラスに日本人が多かったこと」という感想があった。提携先の大学のクラス

全員が日本人だったことが原因だったと考えられる。同大学に2017年に留学した学生からは、「留学先の先生の質。ホームステイ先に日本人の子がきたこと（緊急事態ではなく）」という回答があった。2016年のオーストラリア半期留学では、同じ大学に留学した２名が「クラスのほとんどが日本人だったので、それがなければ、もっと友達を作ったりできたのかなと思います」「私たちのプログラムでは、まずES１－ES５のクラスに分けられたのですが、ほとんどのクラスが日本人で占められていたので、少しがっかりでした」と回答している。更に、同大学へ１年留学した学生２名からは「私が留学した大学には、前から提携している大学の人達が多数いて、日本人が少し多い時期も合ったように思います。そしてキャンベラのようなJapan clubの活動があまりなかったのも少し残念に思っています」、「最初のクラスでは日本人がほとんどのクラスだったので、友達がいない初めの時期にとっては、外人と話す機会を作るのが少し大変でした」という感想があった。しかしながら、このように回答した６名の学生のうち、満足度については、１名が満足度３、３名が満足度４、２名が満足度５（満足度のスケールは、上述したものと同じ）という回答をしている。このことから、日本人学生が現地のクラスにたくさんにいることで、不満をもつこともあるが、それによって、留学の目的を果たすことができなくなるということには繋がらないことが分かる。

サンプル数が非常に少ない為、一般化はできないが、本学科の留学プログラムの学生の満足度としては、半期よりも１年プログラムの方が満足度の高い結果となった。また、上記のコメントのように、現地のクラスに日本人がたくさんいたという不満をもったイギリス半期、オーストラリア半期・１年のプログラムの満足度は、アメリカ１年の次に続いていることを見ると、日本人が現地クラスに多くいるからと言って満足度や留学の目的の妨げにはあまり影響しないであろうという結果となった。

表５．留学した学生の満足度について

国	期間	回答数	満足度
イギリス	半期	12	4.17
アメリカ	半期	14	3.92
オーストラリア	半期	30	4.20
カナダ	半期	3	4.00
イギリス	１年	0	
アメリカ	１年	4	4.75
オーストラリア	１年	12	4.17
カナダ	１年	0	
イギリス合計		12	4.17
アメリカ合計		19	4.11
オーストラリア合計		42	4.19
カナダ合計		3	4.00
半期合計		59	4.11
１年合計		16	4.31

満足度（留学の目的を達成できたか）
5: 目的を達成できた
4: 大体目的を達成できた
3: どちらとも言えない
2: あまり目的を達成できなかった
1: 目的を達成できなかった

＜留学とTOEICの上昇の関係について＞

留学自体は、TOEICの上昇に関係しているのかということに関して、大里・早田(2006)は、留学自体は、効果的な英語力の増進法であると述べている。しかし同時に、留学へ行かないでも英語力を増進できるが、明確な目的意識をもち、ビデオ視聴、リスニング教材聴取、筆写等を通して毎日少しずつ自己学習を進めることができる場合のみ増進できると述べている（大里・早田，2006)。そういった意味では、自己学習で自分自身を律することができない学生の場合は、留学へ行く選択をした方が確実に英語力を高められると言えよう。野中・関（2016）の資料には、3週間留学、3ヶ月留学、6ヶ月留学を比較した際に、3週間留学は、5人〜14人での留学、3ヶ月留学は、1〜3人での留学、6ヶ月留学は1〜6人での留学と、6ヶ月留学の方が3ヶ月留学よりも多少大きい人数での留学となっているが、TOEICの伸びは、3週間の語学研修で平均20.2点、3ヶ月留学で平均80.5点、6ヶ月留学で平均128.9点のそれぞれ有意差のある上昇の結果を得たとある。サンプル数は少人数ではあるが、この研修では、3ヶ月留学の方が、6ヶ月留学よりも比較的少人数で催行されていることから、留学する際の人数よりも期間がTOEICの上昇に関係している可能性がある。

表6．留学グループの人数について

	語学研修	短期留学	短期留学
期間	3週間	3ヶ月	6ヶ月
1人グループ	0	3	1
2人グループ	0	2	3
3人グループ	0	1	1
4人グループ	0	0	3
5人グループ	1	0	0
6人グループ	3	0	1
7人以上10人未満	3	0	0
11人以上15人未満	3	0	0

(2016, 野中・関 , 語学研修・短期留学参加者数の資料を元に筆写が作成)

野中と関（2016）によると、留学期間と英語運用能力の変化について、3週間と3ヶ月、6ヶ月の留学期間とTOEICスコアの上昇を検証したところ、3週間の留学、6ヶ月の留学共にリスニングパートでの有意差のある得点上昇がみられたとあるが、リーディングパートでは、6ヶ月留学のみで有意差のある上昇が見られたとあった。ただし、スコアが320点以下といった元々英語運用能力レベルが低い学生は、リスニング・リーディングの両方で統計的に有意差ありとされる得点の上昇が確認できたとある（野中・関，2016)。土平（1998）は、ニュージーランドへ5ヶ月の留学を行なった結果、TOEICの伸びから、リスニングパートは留学とTOEICの伸びが高い相関関係をもっているが、リーディングセクションと留学の相関はないと述べている。どちらも少なくともリスニングパートでは、留学を通して伸ばすことができると述べており、TOEICの点もそれに応じて伸ばすことができると言えよう。レパヴーと土平(1997)は、

ニュージーランドへ８名のグループと13名のグループを５ヶ月間送り、TOEICの点数の上昇を調べたところ、８名のグループでは、３名100点以上の伸びを示した学生がおり、13名のグループには５名100点以上点数を伸ばした者がいた。こちらでも多い人数のグループでも点数を大きく伸ばした学生がいることから、留学のグループ人数とTOEIC点数の上昇には、関係がなく、個人の現地での生活の仕方次第ということが言えるかもしれない。土平（1998）も、現地での言語学習者への動機づけが言語学習効果に大きく関わってくると述べている。服部（2013）は、日本人は群れるのが好きな国民であり、群れることで他人と価値基準を共有し、自分自身が孤独であることを忘れられると述べている。鈴木（2010）も、日本人は群れることが習性であると述べ、Norbury(2003)、Stronach(1992)、Sheldon(1985)、Reischauer(1980)の叙述を挙げることで、いかに日本人が群れる習性の国民性をもっているかについて述べている。本学本学科の学生で、１人で４ヶ月の留学をした者がいたが、結局現地の日本人と仲良くなり、四六時中その日本人の友達と行動を共にしていたという話がある。そういった学生は彼女だけではない。したがって、少ない人数で留学する機会を与えてもその少ない人数で群れたり、たとえ１人で行なっても現地の日本人と日本語で四六時中会話していたりしたとしたら、留学のグループ人数を少なくするということにはこだわらないでよいかもしれない。

自律して日本で英語学習ができない者は、留学をすることで一定の英語力、特にリスニング能力を短期間でも上昇することができる。ただし、元々英語力が高い者は短期間での上昇は難しく、その場合、長い期間留学する程、英語力（TOEIC）が伸びると言えよう。留学の際の人数よりも期間の方が留学の効果に影響していると考えられるとともに、個人の英語力を伸ばす為には、個人での努力が留学先でも必要となることを事前指導すれば、グループで留学しても期間を伸ばすことによって留学効果が得られると言えよう。

＜企業が求める留学について＞

留学期間について、総務省が調べた平成27年度の実績によると、日本の大学等に在籍しながら留学した84,456人のうち、60.7%の学生が１ヶ月未満の短期留学であり、20.9%の学生が１ヶ月以上６ヶ月未満であることから、全体の81,6%の学生が６ヶ月未満の留学をしている（2017，総務省行政評価局）。一方で、企業側が求める人材の留学期間は、平成29年の総務省のグローバル人材育成の推進に関する制作評価によると、47%の企業が１年以上、35%の企業が６ヶ月以上１年未満を留学期間の理想と回答し、１ヶ月未満及び１ヶ月から３ヶ月の留学を理想としている企業は、ほぼ0%であることから、企業が求める人材の留学期間と学生が行なっている実際の留学期間に大きな隔たりが生じていることが分かる。塚本（2014）によると、上場企業3,712社の84.5%が仕事で英語を使い、91.7%が社員の英語での会話能力の向上を望んでいると述べている。また、77.4%の企業が社員の採用に際し、TOEICの点数を考慮していると述べている（塚本，2014）。佐藤（2016）の調査によると、調査した過半数の企業が新卒時に英語能力を考慮していると回答し、評価できるTOEICの点数を730～855点、少なくとも470

～725点が内定を得るには必要な点数としている。ただし、点数はあくまでも膨大な応募者から選別する為の手がかりであり、企業は新卒の学生に対し、英語能力とは別にコミュニケーション能力、つまりプレゼンテーション能力、協働の能力、聞く・話す・書く・読む能力が必要であると考えている（佐藤，2016）。川島（2014）は、企業が大学に求めることとして、留学やホームステイ等を通してコミュニケーションの機会を与えることが必要だが、単に留学するだけでなく、社会貢献活動や環境ボランティア活動などのプログラムを通して実践の場を提供する等、単なる語学留学以上のものを学生のうちに経験することが必要であると述べている。平成29年の総務省のグローバル人材育成の推進に関する政策評価によると、企業が求めるグローバル人材像として、語学力の習得のみならず、現地の国民性や習慣・文化・価値観などを理解している異文化理解力があり、国際的な視野が広く多様な価値観を受容することができる人物を挙げている。実際に留学した学生の経験に係る調査(2011，独立行政法人日本学生支援機構)からは、留学で得たものについて「視野が広がった」54.0%、「語学力」33.1%、「異文化・国際感覚」31.8%、「友人」29.3%、「価値観・考え方」24%、「コミュニケーション能力」16%が上位６位となっていた（表７）。期間別では、３ヶ月未満とそれ以上との違いについて、語学力の上昇や現地での友人を作った等の具体的なものについてのみ、際立って長期留学と短期留学の違いが見られたが、自己の感想や感覚である「視野が広がった」「異文化・国際感覚」については、留学期間の違いからはあまり差が見られなかった。唯一、価値観・考え方の変化が４年以上のみ大きかった。グローバル人材像の異文化理解力、国際的な視野が広さ、多様な価値観の受容については、自己の感想や感覚的なものである為、測ることが難しい。本学科の学生が留学した個人の感想を綴ったが(添付資料１)、やはり留学期間に関係なく、視野が広がった、異文化感覚が得られた、国際感覚が身に付いた、価値観や考え方が変わった等、何か得られたと感想を述べていた。

以上のことから、企業は全体の８割以上が６ヶ月以上留学した人材を希望しており、TOEICでは少なくとも470点以上、できれば730点以上ある学生を求めていることが分かった。また、企業は語学力だけでなく、異文化理解力やプレゼンテーション能力、聞く・話す・書く・読む能力も就職活動を行う学生に求めている。このことから、留学期間については本学科の留学期間の設定と企業側の要求が合致したことが分かる。しかしながら、異文化理解能力や国際感覚については個人的な留学での修得になり、物差しで測ることはできないこと、また、企業が求めるプレゼンテーション能力、聞く・話す・書く・読む能力については、本学科の授業で磨くことも可能であることから、学科全体の科目と一緒に留学プログラム構成を考えることで、より企業の求める人材に合致した学生の教育をすることができるではないだろうか。

表７．留学で得たもの

	視野が広がった	語学力	異文化・国際感覚	友人	価値観・考え方	コミュニケーション力
全体 (N=1506)	54.10%	33.10%	31.80%	29.30%	24.00%	16.00%
３ヶ月未満 (n=262)	58.40%	19.80%	33.20%	20.20%	24.00%	10.30%
３～６ヶ月未満 (n=164)	55.50%	23.20%	31.10%	26.80%	19.50%	19.50%
６～１年未満 (n=351)	54.70%	35.60%	31.60%	37.90%	23.60%	16.80%
１年～２年未満 (n=389)	50.40%	39.80%	31.10%	31.10%	22.10%	16.70%
２年～４年未満 (n=184)	58.20%	36.40%	34.20%	26.10%	25.50%	19.60%
４年以上 (n=156)	47.40%	39.10%	29.50%	27.60%	32.10%	14.10%

(2011, 独立行政法人日本学生支援機構の資料を元に筆者が作成)

＜留学プログラム数と高校生へのアピール度との関係について＞

2016年に高校卒業の男女５万人を対象として、リクルートが行なった調査結果では、大学進学先を決めるにあたって重視したことは、学びたい学部・学科・コースがあること（66%)、校風や雰囲気がよいこと（39%)、就職に有利であること（38%)、自分の興味や可能性が広げられること（37%)、自宅から通えること（35%）であり、その中の就職に有利であるという意味については、企業への就職率がよいこと（47%)、就職活動のサポート体制がしっかりしていること（33%)、希望する職種につきやすいこと、資格試験の合格率が高いこと（31%)、希望する業界への就職が強いこと、大手・有名企業への就職実績がよいこと(30%)であった。大学進学者のうち、大学を決める際に国際的な取り組みをしているかどうかを重視した割合は全体の27%であった。また、進学先の大学が国際的な取り組みをしていると感じることがらについては、留学制度が充実している（63%)、外国語を使う授業が多い（54%)、海外からの留学生が多い（42%)、海外の価値観・文化を理解する機会がある（41%)、海外の提携校が多い(37%)、語学力取得の為の施設・設備がある（32%)、留学補助金制度がある（25%)、学校や学部の名前に「グローバル」などの言葉が入っている（21%)、外国人の先生が多い（17%)、卒業生が海外で活躍している（14%)、留学生と生活できる国際寮がある（15%)、研究内容が国際的に評価されている（11%）等が挙げられていた（リクルート，2016)。留学の意向については、大学進学者の中の34%が希望しており、男女別では、男子よりも女子の方が4.5%程高く留学の希望を示している。留学したい理由としては、英会話ができるようになりたい（75%)、自分の視野や考え方を広げたい（69%)、外国の価値観・文化などを理解したい（60%）となる一方、留学したくない理由として、費用が高い、語学が苦手、治安への不安挙げられ、

2011年の統計に比べ特に女子で増加したのは、海外の治安に不安があるから（40%）、海外で仕事をしたいと思わないから（33%）であり、海外でテロが続く中、特に女子の治安への不安が増加していると述べられていた（リクルート，2016)。日本人学生の留学への阻害要因について、平成26年に文部科学省が行った調査によると、帰国後留年する可能性が大きいこと(67.8%)、経済的理由（48.3%)、帰国後の単位認定が困難なこと（36.8%)、助言教員の不足（26.4%)、大学のバックアップ体制がよくないこと（24.1%）等を挙げている。

大学進学者全体のうち約16%が留学について関心を示し、進路を決定していることから、本学科に留学制度があるということ自体が、高校生の進路へのアピールにプラスの影響を与えていると言える。また、本学科が行なっている留学への補助金制度も高校生に対して魅力的であり、外国人の先生の授業数が多いことも高校生に対して十分アピールできるだけの環境が整っていると言える。ただし、本学科で留学する学生のうち95%以上が女子学生である。上述したように、女子は安全面への不安が増加している為、しっかりとしたバックアップ体制を整えておく必要がある。しかしながら、プログラムが増えることで、事務手続きが煩雑になったり、連絡が行き届かなかったりする危険性もある。小林(2011)によると、国際交流関係の業務は、一般的に膨大になり易い為、現職の職員での対応だけでは難しい場合には大使館や領事館のサービスを使用したり、信頼のおける業者に委託したりするという手段も選ぶべきであると述べている。本学科では2019年度春留学より、学生の申込手続きを業者に委託することを開始している。これにより学科で行なっていた事務手続きが減り、学生への連絡を小まめに取れるようになったことは改善点と言えよう。外部業者による危機管理セミナーの出席や危機管理メールの留学中の学生への配信等を行ない、現在も学生の現地での安全対策に力を入れているが、今後はプログラム数を減らすことで、学生により丁寧な対応と安全面の強化を図っていけるとよいだろう。

＜おわりに＞

本稿では、①留学した学生の満足度について、②留学効果とTOEICの関係について、③企業側から見た留学した学生の就職利点について、④留学プログラム数と高校生へのアピール度との関係の４つの観点を検証したが、①の留学した学生の満足度については、半期より１年プログラムの方が満足度の高い結果となり、日本人が現地クラスに多くいるからと言って、満足度や留学の目的の妨げにはあまり影響しないであろうという結果となった。次に、②の留学効果とTOEICの関係については、留学する際の人数よりも留学する期間がTOEICの上昇に関係している可能性があり、現地での言語学習者への動機づけを行うことが重要である為、事前指導の重要性を確認した。③の企業側から見た留学した学生の就職利点については、企業はできれば１年以上の留学を経験し、730点以上のTOEICを持っている者、プレゼンテーション能力や聞く・話す・書く・読む能力が備わっている学生を求めている。本学の留学プログラム参加者も、近年半年の留学への参加者が減り、１年留学への参加が増えている傾向があること、プ

レゼンテーション能力や聞く・話す・書く・読む能力は、本学科の授業等と連携することで更に伸ばすことが期待できる。④の留学プログラム数と高校生へのアピール度については、本学科の留学制度、特に留学への補助金制度が高校生に対して魅力を与えていると言える。学科の授業や学業環境も高校生に対して十分アピールできるだけの環境が整っており、学科の授業と留学とを併せて再構成するとより良いプログラムになる可能性を秘めている。本学科で留学する学生のうち95%以上が女子学生であるが、女子は留学に関して特に安全面に不安を抱いていることから、より安全に留意したプログラム構成を考える必要がある。

以上のことから、留学のスタイルとして、１年プログラムが、留学者のTOEICをより伸ばすことができ、企業の留学期待年数と合致できる。留学前の事前指導に力を入れることで、より留学効果を上げ、それによって留学満足度も上がるであろうと期待される。留学補助金制度は今後も続けることが高校生へのアピール力となり、更に留学先の厳選等、安全面を強化することで、より安心感を与えられる。留学の為のTOEICやGPAの目標設定も含めて、留学自体の学科での方針を確認しつつ、授業と連携して構成することで、より良いプログラムを構成できるのではないかと考える。最後に、留学前の面接が、留学中の意欲に関わるかどうかについては、今後の研究で検証していきたいと考えている。

＜参考文献＞

一般社団法人海外留学協議会,　2017,『日本人の留学生数は社会人を含めると20万人超も視野に～「一般社団法人海外留学協議会（JAOS）による日本人留学生数調査　2017」調査レポート～』.

ウールブライト　デニス・塚本　美紀・八尋　春海, 2014,「大学生の英語学習における動機と企業の求める英語力」『西南女学院大学紀要』18 : 201-206.

大里　泰弘・早田　武四郎,　2006,「大学英語教育における英語力増進に関する研究」『現代社会学部紀要』4（1）：35-48.

太田浩・星野達彦, 2015,「平成26年度　日本人海外留学生数に関する調査報告書」国立大学法人一橋大学国際教育センター・一般社団法人JAOS海外留学協議会.

株式会社リクルートマーケティングパートナーズ, 2016,『進学センサス2016　高校生の進路選択に関する調査』.

川島　多加子, 2015,「企業で求められている英語の実証研究―日立グループのグローバル教育の事例報告―」『文教大学紀要』53 : 1－15.

小林　明, 2011,「日本人学生の海外留学阻害要因と今後の対策」『留学交流』, 2 : 1－17

齊藤　義明, 2012,「職業人生のモチベーション―源泉、長期波動、自己調整に関する考察―」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』15 : 79-98.

佐藤　美津子, 2012,「グローバル経営環境のもとでの企業が求める能力―新卒採用を中心に

して―」『多摩大学グローバルスタディーズ学部紀要』 4 ：107-126.

鈴木　雅光，2010,「海外で泳ぐ」『Dialogs』10 : 115-124.

総務省行政評価局，2017,『グローバル人材育成の推進に関する政策評価2017』.

土平　泰子，1998,「海外語学留学が言語能力に与える影響―その効果と質的変化―」『信州豊南女子短期大学紀要』16 : 17-31.

独立行政法人日本学生支援機構，2011,『平成23年度　「海外留学経験者追跡調査」報告書』.

野中　辰也・関　久美子, 2016,「海外語学研修・短期語学留学による英語運用能力の変化」『新潟青陵大学短期大学部研究報告』46 : 89-97.

服部　裕，2013,「個人主義の意味（２）―日本の民主主義と個人主義―」『明星大学研究紀要　人文学部・日本文化学科』21 : 286-304.

文部科学省，2013,『教育振興基本計画』.

吉川雅也，2016,「モチベーション理論における主体性概念の探求―組織における主体性獲得のプロセスに着目して―」『関西学院大学　産研論集』43 : 117-123.

レパヴー　マリ・土平　泰子，1997,「信州豊南女子短期大学におけるニュージーランド留学プログラム―概要とその効果―」15 : 41-48.

Norbury, PauL 2003. *Japan* . London : Kuperard.

Reischauer, Edwin O. 1980. *The Japanese* . 成美堂.

Sheldon, Sidney.1985. *If Tomorrow Comes* . London : Harper Collins Publishers.

Stronach, Brllce.1992. *Popular Culture in Japan and America* . 成美堂.

添付資料1. 留学から得られたこと（自由回答）

3ヶ月・イギリス

・個人的に、１度も病気にならず、大きなこと件にも遭わなかったので、とても有意義な日々を送ることができました。
・人との関わりをたくさんもてて、本当に良い経験になったと思う。大学の授業も、とても為になった。
・日常生活などから、実際に使われる英語表現などを学べて、生きた英語を知ることができて良かった。
・精神的にも少し成長できたと思う。
・いろいろな面で成長できました。
・ホームステイ、学校共にとても充実していました。３ヶ月はとても短かったです。
・イギリス人の友達を作ることができなかったことが残念だった。

3ヶ月・オーストラリア

・日本で学校に通いながら、アルバイトをしている生活よりも、現地での生活は大変に感じました。授業が難しかったり、宿題が多かったりしたので。その分学んだことも多かったし、勉強と両立して遊びも充実していたと思います。私は自分の host family が本当に大好きで、家族との時間を大切にしていたし、より多く一緒に過ごせるようにしていました。けれど３ヶ月弱という時間は短すぎました。もっと長く留学したいです。
・留学に行くか悩んだ時もありましたが、行なって本当に良かったと思います。勉強だけでなく、観光もしてオーストラリアの文化を知ることができました。私にとって大変貴重な時間を過ごすことができました。
・色々な国の人達と話すことができて、とても貴重な体験ができました。授業についていくのがとても大変でした。
・オーストラリアに着いた当初、全くという程話せなかった。でもホストとの日常会話などを通して少しずつ話せるようになった。またそれだけでなく、自信もついたと思う。
・素敵すぎる人たちとの出会いが多く、行なってよかったと思えた。考え方がすごく変わるきっかけとなった。もっとたくさん経験したいと思った。
・　ホームステイもよかったですが、寮と選べると更によかった。けど、とっても楽しかったのでよかったです。
・団体で行なっている分、日本語を話すことがすごく多かったと思う。外国人の友達をもっと増やせばよかった。お昼に、日本人で集まるのは、やめた方がいいと思った。
・たくさんの出会いがあり、楽しかったです。
・全てのことが新しくて、とても充実した時間でした。
・課題が多くて大変だったが、成長できたと思う。
・現地の友達を作ったので、楽しく過ごすことができた。
・英語はもちろん、海外の文化や生活に触れて様々なことを学べました。
・自分の英語力の欠点を再確認することができ、英語の向上になった。
・たくさんの経験ができ、刺激になるものでした。

4ヶ月・イギリス

・レベル別のクラスで、特に大きな不安を抱えることなく、同じレベルの留学生と刺激し合いながら勉強できた。先生達の授業も分かり易く、私たちがよく間違えることを指摘して下さり、とても為になった。
・英語表現を学ぶことができた。日常会話で使う表現が学べた。日本人の少ない（13 人中 3 人）クラスで学べた。多国籍（中国、韓国、サウジ、カザフスタン、トルコなど）の友人と交流することができた。
・日本語を学んでいる現地の生徒が多くおり、話すきかっけがあってよかった。すべてにおいて、以前より積極的になったような気がする。大学が主催するアクティビティがたくさんあり、英語力を向上するきっかけになった
・時々大学でのイベントに参加して、様々な年代の人々と会話ができたことが良かったです。また、summer term では、短い間でしたが、韓国の友達とできる限り会話したり、一緒にご飯を食べに行ったりと、お互いの英語力の向上にもつながりました。
・日本の文化、歴史などに興味のある、また日本語を学んでいる人が来ている、Japan society というサークルがあり、そこで現地の友人づくりができた。
・シェフィールドの人々がとても親切でフレンドリーでした。
・日本人以外の人と友達になることができた。
・韓国やサウジアラビア等、色々な国から来る人が多い為、他国の文化を知ることができたり、他国の人から見た日本の良いところを発券できたりした。今迄自分がもっていた特定の国に対する偏見がなくなったこと等、物の見方を変えることができた。

・現地学校では、日本以外の国から来た多くの留学生と友達になることができ、英語を使う機会も更に増えたと思います。その交流の中で、様々な国の様々な文化、国民性も感じられ、良い体験になったと思います。授業内では、頻繁に意見を求められ、積極的に発言することも慣れてきて自信がつきました。
・英語の文法を英語で理解する練習ができた。英語しか使わずに授業を行ったので、語彙力が向上した。プレゼンをたくさんしたので、人前でしゃべる時に文章を作らず、その場で英文を考える力がついた。
・様々な国の学生がいた為に、異国の文化について知ることができました。少人数クラスだった為、発言する機会が多く与えられたので、発言力はとても向上したと思われます。同時に自分の意見を分かりやすくまとめることが苦手だということを知ることができたので、とても良い機会となりました。
・自分から話しかける意識が向上した。
・現地のイギリス人と直接関わることができる機会が少なかったことかが残念でした。同じレベルだから仕方がないのですが、日本人があまりにも多かったことが残念です。自分がどれだけ今までの日本の生活で自分のやりたいことを忙しいなどと決め付けて避けてきたり、よくない生活習慣を続けてきたりしたかがわかった。
・普段の生活の中でも英語を必要とする機会があることで、英語の上達にもつながったと思います。レストランや交通機関などの会話の中で、自然と会話ができたときがとても嬉しく、自信にもつながりました。
・長期休みに個人でヨーロッパ旅行に行ったので自分たちで問題を解決する力がついた。他の国の文化を知ることができた。
・アクティビティや学校主催のイベントに、自分から積極的に参加することができました。同時に、イベントを通して多くの友人を作ることができたことが、とてもよかったです。
・最後の一週間とても楽しかった
・日本人がたくさんいたけど、その中で、どうやって現地の人と仲良くなれるか考えて、自分から行動する力がついたと思います。また、積極的にやる勇気がでたので、良かったです。でも先生がダメだったからおすすめできません。
・先生方のサポートがとても良かったです。毎日宿題が出るのですが、添削やコメントを丁寧に書いていただけたので、ライティングや語彙が増えてとても良かったです。

4ヶ月・アメリカ

・留学先の授業では、日本人が自分一人で、クラスメイトはみんな異文化の生徒だったので、すごく充実した授業をうけることができた。分からないことがあっても、日本語で友達に助けを求めることができない状況で学習することができたので、すごく良かったし、この状況で何かしら成長できた気がします。
・色々な国の人たちと出会えて、アメリカの文化や英語だけでなく、アラビック、アフリカ、中国の文化や言語も学ぶことができた。
・クラスの人と2回目のクラスで仲良くなることができた。毎週一緒に出かけられた。
・この4ヶ月は、とても長かったようで短かったです。特に最後の1ヶ月は、あっという間でした。この大学の1番良いところは、とにかく日本人が少ないことです。授業中に1人も日本人がいなかったことは本当に私にとってプラスになりました。
・はじめての大学だったので、分からないことが多く、はじめは大変でしたが、色んな方々に助けてもらい、また、その間に英語を使って交渉をしたりし、英語力を伸ばしながら4ヶ月過ごすことができました。
・白人に対して私は心のどこかで恐怖心を抱いていたのですが、同じ人間なのだから、その必要はないと感じ、その気持ちが大分薄れました。
・授業はものすごく簡単だったけれど、その代わり、先生の言うことを理解しようとする方に力を注げたし、他の外国の子に問題を教えることができて、それでまた仲良くなれたりもしました。クラスが少人数かつ英語を学びに来ている人達なので、自分が話した時に、真剣に聞いてくれたり、自分に話してくれる機会も多かったりしたから、リスニング力とスピーキング力は、自然と良くなっていったかと思っています。
・大学の語学クラスで、世界各国の友達ができた。授業や日常生活で、英語をアウトプットするだけの勉強ではなく、同時に現地の人が使っていた、リアルな英語や、日本では習わなかったような、英語を使い、習得することを心がけていた。
・日本人は、私たち 5 人以外にいなかったのでよかった。クラスメイトに、アジア人だけでなく、いろんな国からの子達がいるので、いろんな文化等を知ることができた。
・日本人が、クラスだけでなく、大学内に少数しかいなかった為、英語ばかりが聞こえてくる環境はとても良かった。
・地下鉄やバスなど最初は混乱していたけど、自分で乗りこなせるようになった。ニューヨークで、たくさんのイベントがあって、ハロウィーンパレードや、サンクスギビングなどのパレードは、現地の人と話す良い機会でした。
・到着してすぐの頃は、先生なしでは移動できない程、地下鉄が複雑で心配でしたが、帰る頃には、駅の順番を覚えてしまうくらいに慣れることができました。

・英語を学ぶだけではなく、英語で何かをすることを考えた。現地の小学校のフェスティバルで実際に現地の子供と触れ合い、仕ことをする中で、英語を伸ばすことができた。
・アメリカの公共交通機関は、とても便利だった。バスも電車も 24 時間走っていたので、もし遅くなっても家に帰れるところもよかった。値段が高いのを気にしなければ、何でも手に入る。
・日本人が少なかったので、いろいろな国出身の友達がたくさんできた。
・周りの人達がとても優しく、自分のつたない英語でも、ちゃんと言い切るのを待ってくれたり、間違っていたりしたら、正しく直してくれたので、そこが向上につながったと思います。
・たった 4 ヶ月だけだったけど、それでも旅行では、絶対に体験できないようなことをたくさん体験できたと思います。学校で授業を受ける時間も良かったけれど、一番は友達ができて、遊びに行ったり、お話するができたりしたことでした。
・語学学校に入り、ライティングやスピーキング等、基礎から学びました。ライティングの授業を初めて受けた時、20 分をかけてたった 5 文しか書けませんでした。ですが、2 ヶ月経った辺りから、正しいエッセイの書き方を学んだことで、20 分で 2 段落分書けるようになりました。
・カンバセーションパートナー制度があること。フィールドトリップ等を催し、現地の人との交流をもたせようとしてくれたこと。
・全体を通して、楽しい留学になりました。留学前に行くと決めていたハリウッドや ディズニーに行くことができ、ホストマザーが料理教室の先生をしていて、料理が上手だったので、色々な国の料理を食べることもできました。留学先でできた海外の友達は良い人ばかりで、初めての海外生活がとても良いものとなりました。
・フリータイムはたくさんあったけど、お金と交通手段が十分になかったので、充実した生活を送ったとはいえない。でも、フィールドトリップやカンバセーションパートナーのお陰で、色んなところに行けたし、経験できたので良かった。

4 ヶ月・カナダ

・小論文を各授業では、一度自分で書いたものを先生が間違いを全て指摘してくれた。留学生同士での会話の授業があった為、色々な国の友達を作りやすかった。現地の教員等にも日本人がいないので、甘えずに緊張感を保ったまま、生活できた。
・田舎で治安の良い場所だった為、安心して勉強ができた。小さな町の大学に多くの留学生がいた為、現地の住民も留学生に慣れていてとまどいなく対応してくれて、人種差別などもなかった。

4 ヶ月・オーストラリア

・先生がとてもフレンドリーで、授業もずっと座っているだけでなく、アクティビティもあり、楽しみながら受けることができた。火曜日と金曜日に conversation class というのがあって、現地のいろんな年代層の人と話すことができたり、他の留学生とも関われたりすることができるので、とてもいい機会だった。
・クラスの先生が、他クラスとの会話クラスを設けてくれたので、レベルが上のクラスに友達を作ることができた。大学内にもお店が多く、必要な物が買えるし、レンジなどもあるので、自分で持って行くお昼ごはんも温めたりできてよかった。
・授業の 3 分の 1 以上はスピーキングで、先生も参加し、発音や文法の訂正を助けてくれた。外国人学生をサポートする多くのイベント（BBQ、conversation class 等）があり、そこに参加し、友達を作ることができた。
・大学の授業では、クラスが日本人ばかりだったので、自分達で外国の方との関わりに対して向上心が上がったと思うので良かったと思う。
・最初の土曜日に、BBQ のイベントに参加し、そこで他国の友達ができました。このようなイベントが何度も行われていたので、とてもいい機会だと思いました。海が近かったり、緑が多かったり、自然をたくさん感じることができ、とてもいい環境でした。いくつかのボランティア活動にも参加しました。
・今までだったら、自分達だけで海外の旅行とか、飛行機とか考えられなかったけれど、留学を通してできるようになり、主にリスニングが伸びたと思う。海外の友達もでき、一緒に出かけたり、英語で話したりすることの楽しさがわかった。
・日本人以外の友人が多くでき、自分から週末遊びに誘ったりして、日本人以外とは全て英語だったので楽しく会話できた。留学を通して、自分から話しかけたり、英語を自分から話したりすることが、日本にいる時よりもできるようになったと思う。
・オーストラリアでの生活、オーストラリア人の人柄を知ることができた。オーストラリア人以外の学生とも交流ができた。文化や宗教を知ることができた。
・日本人は私たち淑徳生だけで、授業も日本人は 1 人だけで、ほとんど異国の人と受けることができたのでよかった。ジャパンクラブがとても活動的で本当によかった。クラスメイトは私たちと同じで英語を学んでいる人たちだが、ジャ

パンクラブは現地に住んでいる学生で英語がネイティブの人達と関わることができたので、刺激を受けることができて、本当に楽しかった。図書館には、パソコン、机などが十分あって、さらに 24 時間、土日も開放しているのでとても快適だった。
・日本の大学で習えることを再確認できたり、日本の大学で習えなかったことを学ぶことができたりした。特に、アカデミックな文書の書き方や、エッセイの書き方を学ぶことができた。また、初めてのプレゼンテーションを、英語ですることができて、とてもよい経験になった。その他にも、大学で出会った外国人の友達ができて、遊びに行ったり、ご飯を一緒に食べたり、外国人の留学生と仲良くなれることができた。
・アカデミックな文書の書き方や、英語でのプレゼンテーションの仕方を学ぶことができた。日常生活において、ホームステイをしている為に、英語を聞く話す場面がとても多く、日本ではできない経験をしつつ、効果的に自分の英語力を上げることができた点がよかった。
・自分は、たまたま日本人一人のクラスで、何をするにも英語を使ったし、人一倍集中して聞かないと先生はリピートしてくれないので、人一倍頑張ったと思う。初めて英語での Essay や。プレゼンで戸惑うところもあった。
・私のクラスは、日本人が 1 人だったので、外国人の友達ができて、英語で話す機会もたくさんあったので、よかったです。ジャパンクラブのイベントでは、いろいろな国の人と話すことができたので、とても楽しかったです。そのおかげで、スピーキングを向上させることができたと思います。
・大学に WI-FI があったことがよかった。日本人が一人のクラスになり、全く日本語を使えない環境で、授業を受けることができてよかった。他の国の友達ができたこと、JAPAN クラブの集まりが頻繁にあって、現地の人と交流ができたこともよかった。
・パーティーの時に、いろんな人と話ができた。オーストラリア人の友達と旅行できた（シドニー）、オーストラリア人の友達と旅行先で一緒に行動できた（ゴールドコースト）
・今回のキャンベラのプログラムは、クリスマス、年末年始をオーストラリアで過ごすことができて、オーストラリア文化を経験できたのはよかった。あと、個人的に、携帯電話を失くした時に、先生に連絡して、すぐ対応していただいたのが本当によかった。愛知淑徳大学で登録した保険会社の方も最後まで細かく対応してくれたのでとてもよかった。
・日本との違いを実感することができたのと同時に、日本とオーストラリア、それぞれの良さにも気づくことができた。分からないことや困ったことを、積極的に聞けるようになった。トラブルが起きても、自分で何とかできるようになった。精神的にも強くなった。
・最初は少し戸惑ったが、交通機関については、ホストが教えてくれた為、困ることなく生活できた。初めから通りすがりの人に話しかけることに、戸惑いがなかった為に、分からないことがあっても、誰かに尋ね、みずから解決することができた。
・私は Japan Club を通して、ネイティブの友達が増え、個人的にご飯に行ったりした。また、様々な場所へ旅行し、観光地に行けることができた。ホテルではなく、バックパッカーホテルに泊まった。良い経験になったと思う。
・2 週間の休みの間に、旅行に行けたこと。クリスマスと年末年始を、オーストラリアで過ごせたのはすごく良かったです。海外でクリスマスをその現地の家族と過ごすことは、多分もう一生できない経験だと思うので、良い経験だったと思います。
・ジャパンクラブに所属して、多くの国の人たちと交流できて、みんな、とても英語が上手なので、その人達といっぱい話して、スピーキング力が向上した
・私の大学は writing をとても重視していたので、writing の力が向上したと思います。
・Writing, Speaking が上達した, 他の国の文化や食事の知識を知ることができた
・違う国の友達がたくさんできた。英語での会話が増えて、分からないことを教え合うことができた。
・授業の中で話すことが多かったので、スピーキング能力が伸びたと思います。様々な国籍のクラスメイトがいるので、英語でコミュニケーションをとることができた。
・Writing の授業が多かったため、Essay の書き方についてよく学べた。
・Writing の授業では、パラグラフの構造について学べた上、先生が毎日添削をして下さって、自分がよく間違える部分などを直して下さるので、とても自分の為になった。
・何か問題が起きた時、自分で考えて対処することができるようになった。
・日常生活の中で、他人に道を訪ねる時など、シャイにならずに話しかけられるようになった。日本では学べない会話の流れや言葉を知ることができた。
・最初はお店に行くのも怖かったが、店員さんとも少しは会話できるようになった。時々バス停で会う人とも会話を楽しめた。挨拶は必ずする仲になれた。
・冬は思ったより寒くて驚いた。もう少し夏の期間に行きたいなと思った。
・日本人以外の友達をつくったことによって、強制的に英語を使う環境になったこと。
・ボランティアに参加したり、友達と旅行したりすることで、思い出を作ることができた
・文法を復習することができた。オーストラリア以外の他国の文化をクラスメイトとの会話を通じて知ることができた。Japan club を通して現地の人と友達になることができた。他国の生徒に積極的に話しかけることができた。

・多くの日本人以外の友達ができたこと。日本で当然のように捉えられていることも、彼らにとってそれは当然のように当然ではない、ということがよくありました。様々な人種の人が共に暮らすオーストラリアで、それは尊重されるべきことなのだと思いました。自分の主観や考え方が変わりました。思い込みや先入観を捨てて、他人と接して行きたいと思います。
・英語での注文の仕方を学ぶことができた。旅行をする際、宿泊先や飛行機の手配の仕方を学ぶことができた。
・他地域から来ていた日本人との交流もありました。それぞれに置かれた状況でそれぞれの目標に向かって努力する方々の姿に感銘を受けたと共に良い刺激となりました。
・日本人との関わりを避けること、これは、一番大切かもしれません。でも時に、日本人でも英語で話そうとしてくれる方もいます。常に、向上心がある人といるのも、自分のモチベーションをあげるきっかけになると思います。
・休みがあれば、文化を学ぶためにも、楽しむためにも、現地でできた友達と一緒に旅行によく行なっていた。もちろん、英語の勉強にもなるけど、異文化を学べるだけでなくて、今までしたことのなかった、新しい経験だらけで、全てが夢のようだった。毎日、勉強は続けていて、一日に吸収する英語の量がとても多くて、日本で勉強している時の何倍も効率が良く、すぐに向上して、とても充実していた。
・メルボルンは自然もあって、ビーチもあって、気候もとても良くてすごく過ごしやすかった。Myki カード（定期）を買えば、バスも電車もトラムも乗り放題なので行きたい所にすぐ行けるのがとても便利でした。オーストラリアの人は、とても優しくて授業内で現地の人に質問をしなければいけない時に、いつも快くひきうけてくれたり、お店で料理を食べている時にスタッフが声をかけてくれたりしてくれてとても嬉しかった。
・連休を使って、シドニーに旅行したのですが、その前のチケット等の段階でミスをしてしまい、それを訂正するために、ホストや友達、先生、エクスペディアや空港の人に説明したり、助けてもらい、ハードな経験もしたのも今となっては良かったです。
・先生方のサポートが強く、心から英語の勉強を楽しむことができました。そのおかげで英語力の向上をしたい、という気持ちが強くなりました。大学では、毎日が新しいことへの挑戦で、とても充実した日々を送ることができました。留学生のことを真剣に考えてくれる Victoria University,　これから留学を考えている人に、是非おすすめしたいです。
・たくさんの日本人以外の友達ができたこと。（毎日、英語でコミュニケーションをとって、授業中でさえも、積極的なクラスメイトのおかげで毎日が楽しくて、先生もフレンドリーで、質問もしやすかったし、何よりも英語を通してみんなと仲良くなって、それが英語の勉強の為、とかではなく、本当に心から仲の良い友達が何人もできた。今でも何人かと連絡をとったり、電話をしているし、これは、英語の勉強にもつながる。本当に良い経験だった。
・学生がみな留学生のため英語を学びたいという意欲が強く、さらに様々な国の文化も知ることができる。先生もとても優しく授業が終わった後も質問に分かりやすく答えてくれたり、会うと常に話しかけてくれるので、何気ない会話もすることができるのがとても良かった。また、イベントも多く、学校内や学校外に行ったり、クラスメイト以外の人とも交流する機会が多かったのがとても良かったです。VUE の先生は本当に分かりやすくておもしろくて楽しくて最高です。
・クラスに他国から来ている子達がたくさんいて、クラスはもちろん、お昼や遊びに行ったりなど、交流できました。私が困っていた時に、相談したら、一緒に解決してくれた。

1 年・アメリカ

・Conversation partner や field trip が良かった。先生達もすごく優しく、フレンドリーで面白い人が多かった。少人数クラスで積極的に発言したりすることが増えた。先生達がそういうことを求めてくるので、トレーニングにはよい環境だったと思います。
・最初は会話するにも気を張っていたし、うまくコミュニケーションがとれなかったが、次第に積極的に現地の人達とも話せるようになったと思う。
・とても建物がきれいで、ジムや図書館等の設備が充実していたと思う。
・大学がとても大きく、自然が豊か。様々な国から来ていて、国際色豊であると感じた（文化の違いを理解してくれることが多い）。フットボールを生で初めて観戦することができた。他にもバスケットボール、サッカー、野球、テニス等。ジムのグループレッスンを通して現地の友達ができた。
・カンバセーションパートナープログラム一週一回のフィールドトリップ、月 1 のミーティング、UNCQ の生徒と友達になる機会を与えてくれるので、とても良かった。たくさんの友達ができて、みんなで旅行へ行ったりした。学校のイベント。フレンドシップファミリー一寮に住んでいたけれど、サンクスギビングやクリスマス等のイベントの際には、一緒に楽しんだ。
・2 セメスター滞在した為、サンクスギビングやハロウィーン、復活祭など、たくさんのアメリカ文化を体験することができた。一週間の春休みには、IEP のアシスタントとして、入っていた大学院生に誘われ、international student15 人でスモーキーマウンテンに行くことができ、そこで思い出と友達が増えた。IEP では、アメリカ文化のみならず、

他の IEP 生徒からその国の文化について知ることができた。

1 年・オーストラリア

・たくさんの濃い経験を通して、英語が上達させられたことだと思います。最初の方は、友達と話す機会を作ることに専念していましたが、本当に上達しているのか不安でした。けれど、半年が経った頃には、半年前とは違うと気づき、英語を話すことへの抵抗、初対面の人との接し方、など、自分自身も変われたと思います。
・通っていた語学学校が、大学に附属していたので、現地の大学生と交流することができた。熱心に勉学に取り組みながらも、日本の学生よりリラックスしている様子を見て、自分の大学生活を見直すことができた。一人で旅行をしたことで、自立することができた。
・大学附属の語学学校だったので、海外の大学の雰囲気も知ることができ、よかったです。また、たくさんの友達を作って、遊んだりすることができたことも、良い思い出です。いつかみんなと再開できるのが楽しみです。
・授業への取り組みの姿勢、なぜなら、日常会話を向上させるため、先生達の話し方を学びたかったから。時間の使い方を考えられるようになった。授業を通じ、友達を作れたこと。
・授業では、エッセイを書くことが自分にとって一番大変でした。ただ、その分、エッセイの書き方、アカデミック英語と、そうでないものを学ぶことができ、Writing の力を伸ばすことができました。
・１日１日を大切にし、英語をひたすら話すことを心がけることができました。学校は、１日４時間なので、授業には友達を誘って町へ行ったり、ご飯に行ったり、家にそのまま帰るよりも、友達と英語を話すようにしました。週末やホリデーも、できる限り、予定を作ったり、経験になるようなことに挑戦したりしていました。
・アルバイトと旅行も英語を向上させることができた手段だと思います。アルバイトでは、大学のカフェで働いていたので、学生やネイティブスピーカーのリアルな英語を学ぶことができた。そして、カスタマーサービスをすることに対して、自信がつきました。旅行先でも、たくさんのネイティブスピーカーと話すことができ、今でも連絡を取ったり、日本に来てくれる友達ができたりしことも大きな成長だと思います。
・期間も長く、ホリデーもあったので、旅行をたくさん行えたこと。旅行中は、英語を話さなければならない場面がたくさんあり、英語力の向上にもつながったこと。
・約９ヶ月過ごした中で、６週間の休みがあり、オーストラリア内に旅行することができ、その中で出会った人と会話したり、トラブルが起こったりして、いろいろなシチュエーションに強くなったなと思います。
・学校やホームステイ先だけでなく、普段の生活から英語が飛び交っている中で過ごしていた為、基本的に英語に触れることができた。旅行先では、バックパッカーを体験することができたり、様々な観光地を訪れたりすることができた。日本では、日常生活は日本語なので、外国人が普段使うような英語は知れないが、留学先では、それを知ることができるので、その点がメリットだと思う。
・とても自然豊かな大学で、ほとんどの確率でカンガルーが見られました。友達をラングージセンターでは作れないので、gym とかに行なって作るべきだと思いました。
・語彙力とリスニング力が向上しました。くやしい思いを糧に、これまで以上に頑張れたことが良かったです。
・CQU ランゲージセンターでは、discussion がたくさんあり、自分の意見を自分の力で伝える練習がたくさんできたと思う。
・日本では、経験できなかった（ファーム、きれいなビーチに行った等）ことができたこと。オーストラリアの友達だけではなく、他の国の友達もできて、違う文化を学ぶことができた。日本語を知らない海外の人と関わることで、伝わらなかった場合、英語で分かりやすく伝える力がついたと思う
・授業中の積極性（分からない時はためらわず、すぐ聞ける環境下にあった為）、creative thinking （他の国の人達との意見交換を通して）、大きな学校ではない分、先生達との距離も近く、たくさん助けてもらえた。
・やっぱり一番難しかったことは、現地のオーストラリアの友達を作ることでした。ランゲージセンターには他国の友達はいても、オーストラリア人はもちろんいません。だから、私はバレーボールチームに入会し、友達を作る努力をし、やっとできた１人の友達にその人のルームメイトとかを紹介してもらい、一緒に食こととかができるまでになりました。
・自分の思ったことや感じたことを英語で伝えられるようになったことが自分自身一番の喜びであり、そこが成長を感じた部分でもあります。
・休みは一週間しかなかったが、ホストマザーと旅行に行ったり、休みの日は色んな場所に行ったりした。オーストラリア人は、とてもフレンドリーで優しいので、新しい友達に会う度に、自分のスピーキング力が向上し、リスニング力も向上したと思う。
・私たちはあるイベントで、日本人の学生達とかき氷を広めるために、かき氷を売りました。どうしたら買ってもらえるか、どうやって宣伝するかといったような会話をお客さんとすることができたし、自分がスタッフとなって、金額は〜です。など日常会話ではなくて、仕ことやアルバイトで使えるような英語を学ぶこともできたのが良かった。

・田舎だからこそ、家族ご近所の付き合いが近く、たくさんの地元の人と出会うことができました。また、美しい自然を体感できた。Rock Hampton city 全体が留学生に友好的で、市長さんがパーティーを開いてくれた。